

子どもの貧困と里親制度

国際こども・福祉カレッジ・田中秀和
愛知新城大谷大学・吉川知巳

【背景】

近年、日本では子どもの貧困が様々なメディアで報じられ、その現実が少しずつ明らかになってきている。先行研究は、貧困問題が親世代から子世代へと連鎖していくことを明らかにしており、この現実に対する公的支援が今日、切実に求められている。一方、児童の社会的養護に関しては施設における支援と並んで里親制度が日本には存在している。社会的養護を必要とする子どもたちの社会階層は低所得者層・不安定就労層に集中している現実がある中で、里親制度が今日改めて見直されている。本研究は、子どもの貧困を里親の支援から見つめることにより、その現状と課題の整理を行う。

【方法】

子どもの貧困や里親に関する研究は、主に社会福祉学の中で行われている。そのため、これらの文献を中心に調査した。また、社会学や教育学の分野でもこれらの研究は行われており、それらの文献の調査も行った。

【結果】

子どもの貧困は、近年になり議論が盛んになってきた事柄である。松本は、子どもの貧困がもたらす論点として、5点に整理している。それらは、1 健康への負因、2 学業達成の不利・教育機会の制限、3 子どもらしい経験と活動の制限、4 負の経験からの回復の機会の制限、5 社会的自立の不利と困難、である。¹⁾ 1 は、貧困状態が子どもの健康に悪影響を及ぼすこと、例えば、貧困と関連する児童へのネグレクト研究において歯科受診が少ないことが挙げられる。2 は、教育社会学の先行研究がたびたび指摘しているように、貧困家庭の子どもは概して低学歴であり、それが職業選択の不利につながり、結果的に貧困が次世代に連鎖するというものである。3 は、貧困家庭は、経済的・精神的ゆとりがなく、子ども自身が楽しいと感じる経験が不足しがちであることを指す。これは、様々な文化的経験が不足することによって、貧困階層のハビトゥスを身につけ、文化的資本の不足を導くことになる。黄は、日本のエリート高校に関する調査の中で彼らが、エリートのハビトゥスを自然に身につけ文化的資本を獲得していく過程を描いている。²⁾ このことは逆に、貧困家庭で育つことがいかに不利であるか暗示している。4 は、3 とも関係するが、貧困家庭は様々な面において余裕がないために、子どもの「失敗する自由」を奪っている現実を指す。5 は、子どもの貧困が複合的に子どもに対して悪影響を与えることで、社会的自立を不利な条件でスタートせざるを得ないことを指している。

松本の議論は、子どもの貧困に関してのものであるが、これは、社会的養護とも大きく関連するものである。

社会的養護と貧困に関する調査は、社会的養護を必要とす

る児童の社会階層は概して低いことを示している。しかし、社会的養護の中でも、里親に関しては、これまでの議論とは異なる傾向があり、注目に値する。

吉川は、里親は自家一戸建てが約8割を占め、年間収入も一般家庭の平均所得の20%を上回っていることを文献調査により明らかにしている。³⁾ これは、里親家庭が概して一般家庭に比べて経済的余裕があることを示している。日本の社会的養護は施設入所児童が大半であり、里親制度を利用している子どもは珍しい存在である。しかし、上記の吉川の指摘は、子どもの貧困を断ち切る手段として里親制度がより日の目をみる可能性を示しているのではないだろうか。

【考察】

吉川は、上記の研究の中で、「里親制度や里親と子どもの関係について当事者自身が語って一般社会に周知をはかり、医療・福祉関係者などの教科書にも里親制度について取り上げることが必要」と述べている。また田中は、子どもの貧困の解決手段として、1 子どもの援助の携わるソーシャルワーカー等が正確な情報をもつこと、2 福祉教育の充実、3 子ども手当等の社会手当の増額、以上の3点を挙げている。⁴⁾

里親家庭の社会階層が概して高い現実がある中、社会的養護を必要とする子どもたちから、貧困の連鎖を断ち切るためにも、今後里親制度がより充実していくことが必要不可欠である。

【結論】

本研究において、子どもの貧困は、児童に深刻な影響を与えることが改めて浮き彫りになった。また、子どもの貧困と社会的養護は関連性の高い事柄であることが明らかになった。さらに、今日の社会的養護において、里親制度はあまり活用されておらず、そのあり方が今後より問われてくるであろうことが推測された。

そうした中で、子どもの貧困を断ち切るための手段としての里親活用の可能性を本研究は示した。もちろん、里親とは経済的要因だけで決定するものではないし、「里親不調」等の問題が起きていることも事実である。しかし、里親は概して社会階層が高く、そうした家庭で子どもたちが育つことは、これまで述べてきたような子どもの貧困を断ち切るための有効な方法であると思われる。そのためには、吉川の指摘にもあるように、今後より里親の社会的認知を高める必要がある。

【文献】

- 1) 松本伊智朗：子どもの貧困と社会的養護，社会福祉研究 103：pp29-37，2008.
- 2) 黄順姫：日本のエリート高校-学校文化と同窓会の戦後史，世界思想社 京都，1998.
- 3) 吉川知巳：養子縁組里親の姿勢と課題-今日的視点から，保健の科学 53(6)：pp427-430，2011.
- 4) 田中秀和：子どもの貧困と社会福祉政策，新潟医療福祉学会誌 10(1)：p24，2010.